

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Valance of Japanese verb, II

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石綿, 敏雄, ISHIWATA, Toshio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001761">https://doi.org/10.15084/00001761</a>

# 自然現象を意味する動詞の用法

石 綿 敏 雄

## 0. あらましと結論

これは、昭和46年度文部省科学研究費，総合研究（A）「日本語の電子計算機処理のための基礎的研究」に関する報告の一つである。

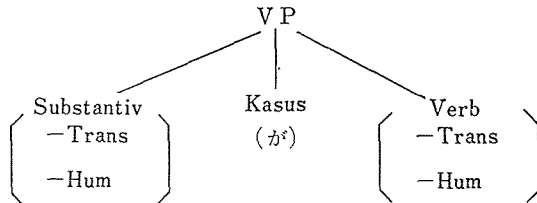
電子計算機による言語処理の多くは、その過程で Lexikon と Erzeugungsregel（生成規則）を必要とするが、この両者のためには、述語を中心とした語彙文法論的研究が必要である。筆者は述語を動詞、形容詞形容動詞、体言＋だの三者に大別し、次に動詞を『分類語彙表』により、抽象的關係、人間行動、自然現象の三つに分けた。このうちまず人間行動に関する動詞をとりあげ、上述の観点から、『国語研究所報告49』で分析、報告した。本稿はその続きとして、自然現象を意味する動詞をとりあげて、その用法を分析し、用語の用法による分類（語彙論的研究）と用語の文構成への参加（文法論的研究）の連絡をはかろうとするのである。

分析の方法は前回と同じであるが、特に主語との関連を重視している。助詞「が」を伴う KWIC の用例集を資料とするが、本稿ではそれに加えて、文学作品や自然科学の啓蒙書もあわせて用いた。

結論——人間の行為に関する動詞にあっては主体が人間で多くのばあい他動詞がこれに対応し、自動詞のなかには他動詞の用法に対応してその対格を主格とするものがかなりあった（たとえば「人が魚を釣る」に対して「魚が釣れる」）。自然現象のばあいはこれに対して、二つの種類のものがあり、いずれも自動詞を基調としている。その一つは「雨が降る」「風が吹く」のように自然現象自体を示す名詞が主格となり、動詞はこれに対応したものが用いられるものである。もう一つは「家が焼ける」「下駄がぬれる」など、動詞の示す現象のおこるところを示す名詞が主格となるものである。「もえる」に対して「も

やす」といふばあい（他動詞）、通常は人間が主体になる。

この一般的な関係を図示すると次のようになろう。それぞれの詳細なばあいは図示を省略する。



なお、本稿では動詞の分類排列は国語研究所の『分類語彙表』にしたがっている。しかしこの種の分析をすすめてゆくと、動詞の分類について新しい手がかりが得られるかもしれない。それについては、動詞の分析全体がすんでから、あらためて考えてみることにしたい。

## 1. 自然現象を意味する動詞の用法

ここでは国語研究所で行なっている新聞用語調査のごく一部のデータ（毎日新聞夕刊半年分で全体の20分の1のデータ）に加えて次のような文学書から用例を採集し、研究資料とした。用例の採集は任意的で、網羅的ではない。

国木田独歩『武蔵野』（武と略）、夏目漱石『草枕』（草）、同『三四郎』（三）、同『行人』（行）、宮沢賢治『風の又三郎』（風）、堀辰雄『美しい村』（美）、島崎藤村『千曲川のスケッチ』（千）

（5V-1）「光」関係の動詞（2.501）、「光る」「輝く」「さす」「きらめく」「ひらめく」；「うつる」「うつす」など。

○星がきらきらと光った（行） ○この燈火も……星のように光っているのです（行）  
○落ちかかった日が、すべての向うから横に光り（三） ○ランプばかりが当世に光っている（三） ○大きな竹藪が白く光る。竹の葉が遠くから見ると白く光るとはこの時初めて知った（草） ○きらきらと光っていた特徴のある眼ざし（美） ○襟留などが光る（千） ○山のかなたは青がかった灰色に光った（千） ○白い歯がまた光った（三） ○向う側のつきあたりがこんもりとどす黒く光っている（三） ○穴がうわばみの目玉のように光る（三） ○電燈が輝いている（三） ○朝日を受けた上野の森が遠く輝いている（三） ○密柑の葉は……輝やいている（草） ○木葉火の如くかがやく（武） ○青い光がさして（三） ○朝日の光が後からさす（三）

○強い日がまともにさしこんだ(三) △春の日ざしが球場いっぱいさしこむと  
 ○月の光がこの谷間にさし入った(千) ○霜、雪の如く朝日にきらめき(武) ○  
 霧柱白銀の如くきらめく(武) ○降雪火影にきらめきて舞ふ(武) ○林の梢に砕  
 けた月の光が薄暗い水に落ちてきらめいている(武) ○長雨の後の日光はことにき  
 らめいた(千) ○稲妻が……白くひらめきました(風) ○大きな木が幾本となく  
 水の底にうつって(三) ○田面に水あふれ林影倒に映れり(武) ○月は緩るやかに  
 流るる水面に澄んで映っている(武) ○帽子の影が女の目にうつった(三) ○そ  
 の目が三四郎のひとみにうつった(三) ○水は清く澄で、大空を横ぎる白雲の断片  
 を鮮かに映している(武)

①. 「光る」から「ひらめく」までは発光体が主格になることがある。そうで  
 ないばあいは百科事典的には何かの光を受けて光るなどするので、主格になる  
 ものはある程度限定されてはいるが、特に語類上の制限を求めることは困難で  
 であろう。光を受けてなどが文脈上ははっきり出ているものとして、「霜、雪の如  
 く朝日にきらめきて」、「降雪燈火にきらめきて」があり、このばあいは助詞  
 「に」が「朝日、燈火」についている。

②. 「うつす」「うつる」は光の反射で、「うつる」ばあいその場所を示すべ  
 く「水」「水面」などに助詞「に」をそえた補語をとる。「うつす」を純粋の自  
 然現象に用いるのは文学的な表現といえよう。「水」、「水面」が主語となり、  
 「うつる」の主語になるものは、助詞「を」をとる。そうでないものは人間が  
 主語になり、人の行為になる。

③. 「ひらめく」「うつる」など、他に種々の用法のある動詞がある。

④. 「△きびしい監視の目が光る」のような表現はイディオマティックであ  
 る。

(5V-2) 「色」に関する動詞(2.502)、「そまる」「色づく」「黄ばむ」「青  
 がる」「黒ずむ」「青ずむ」「青々とする」「さめる」;「よごれる」など。「汚  
 れる」などを除き多くはものの色についていう。用例によっては「色」という  
 ことばが explicite に出ているものもあるが、そうでないものの方がずっと多  
 い。しかし用法としては、何かのものについて、「その色」がどうであるかど  
 うなるかをいおうとするものである。

○富士の中腹に群がる雲は黄金色に染て(武) ○そちこちに立つ稚木のみは総て赤  
 くも黄ろくも色づいて(武) ○濃くこまやかな肉が程よく色づいて(三) ○稲の

熟する頃になると谷々の水田が黄ばんで来る(武) ○英字新聞の黄ばんだのやら(美)  
○あの山桜を丸くしたような葉の中にはもう美しく黄ばんだのも混っていた(千)  
○山のかなたは青がかった灰に光った(千) ○遠くにある立木の色が空に包まれて  
段々黒ずんでゆくにつれて(行) ○蒼ずんだ冬の空(武) ○日は青々とした空に  
低く漂って(武) ○秋が深いので芝の空が充分褪めている(三) ○着物がよごれ  
ます(三) ○金盥は今塵で佻しく汚れていた(行)

「そめる」「よごす」などは他動詞で人間の行為であるが、他は自動詞で、自然現象そのものをさす。「よごす」ものは着物、下駄など(三)。「そめる」ものは、「着物」「羽織」など(三)。

(5V-3)「音」に関する動詞(2.503)、「鳴る」「響く」など。「響く」は「……の音」などを主語にとるが、「鳴る」はあまりそうならないで直接鳴るものが主語となる。「鳴る」「響く」とも自動詞。

○車の音も愉快に響いた(行) ○防波堤に当って砕ける波の音のみが、どどどどんと何時までも響いた(行) ○雨は軒に響くというよりもむしろ風に乗せられて、気儘な場所へ叩き付けられて行く様な音を起した(行) ○櫓を叩く雨滴の音がぼたりぼたりと響いた(行) ○遠く響く砲声(武) ○鐘の音が町々の空へ響いてきた(千) ○ところへまた汽車が遠くから響いてきた。その音が近付いて(三) ○この住がぎいぎいって鳴るたびに(行) ○谷川はさらさら鳴りました(風) ○窓ガラスは雨つぶのために曇りながら、またがたがた鳴りました(風) ○号鈴がしきりに鳴る(草) ○風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声(武) ○野は風が強く吹く、林は鳴る(武) ○鉄瓶がちんちん鳴っている(三) ○法文科のベルが鳴りだした(三) ○どんが鳴る(三) ○そのときヴァイオリンがまた鳴った(三) ○風が枝を鳴らす(三) ○例の竹が枕元でばさついて(草)

「鳴らす」などは他動詞で、どちらかといえば人間が主体である。「風が鳴らす」のような表現は多かれ少かれ文学的表現であろう。「枝を鳴らす」「枝が鳴る」のように、「鳴る」の主語と「鳴らす」の対格語とは連絡がある。なお、「バケツを鳴らす」「床を鳴らす」(三)などの例があるように、この名詞は語類の制限がかなりゆるい。

(5V-4)「澄み・凝り」などの動詞(2.506)、「澄む」「濁る」；「薄らぐ」など。

○天高く気澄む(武) ○風清く気澄めり(武) ○水は清く澄で(武) ○この溝の水は……能く澄でいて(武) ○水が次第に濁ってくる(三) ○すこし白く濁った川(千) ○霧は……やがてそれが薄らいで行くにつれて(美) ○霧がずんずん

薄らいで行って(美)

「澄む」「濁る」の主格は「水」「空気」「気」「川」などであり、「薄らぐ」の方はこの範囲では「霧」のようである。用例が多ければもっと他の例も出てこよう。全体としてみると、これらの動詞の主語は、一種の流体のようでもある。

(5V-5)「煙・乾湿」に関する動詞(2.511~3),「けむる」;「じめつく」「うるおす」「しめる」「ぬれる」「ぬらす」など。

○小屋の中は、空気が通わなくて、煙草が烟って、頭痛がして(三) ○雨にじめつく林の中のようす(武) ○小鳥が来て翼をひたし、喉を湿おす(武) ○湿った空気(千) ○下駄が濡れやしないか(行) ○羽織はとくに濡れつくして(草) ○外はもうよほど明るく、土はぬれて居りました(風) ○今ま雨に濡れたばかりの細枝の繁み(武) △武器・弾薬が雨に濡れた地上に散乱 ○ひたぶるに濡れてゆくわれを(草) ○大分濡れたね(草) ○田圃道の草露は足を濡らして、かゆい(千)

乾湿に関する動詞は、その状態にある具体物が主語になるので、名詞についてはその程度の feature しか指摘できないだろう。特に「ぬれる」など、そうである。筆者のいう「言語辞典的」より「百科事典的類縁性」を考えるべきケースかと思う。このばあいも、「草露が足をぬらす」という表現はやや文章語的であろう。

(5V-6)「晴雨」などに関する動詞(2.515)のうち、「晴れる」「曇る」など。この二つの動詞は「空」という主語がくることが共通であるが、前者は「雨」「霧」などが主語になり、後者は例にあるように「ガラス」「めがね」など transparent なものが主語になることがあり、この部分は共通でない。天候などをいうときは、主語がないことが多い。(この種の統計もおもしろいだろう)。

○空が蒼々と晴れてしまった(行) ○次の朝も空はよく晴れて(風) ○雨も晴れる(風) ○霧が晴ればいいと思っていた(三) ○朝は霧深く午後は晴る(武) ○昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ(武) ○空は此処も海辺と同じように曇って(行) ○今日は午まがらきと曇る(風) ○窓ガラスは雨つぶのために曇りながらまたがたがたと鳴りました(風) ○照ると曇るとで雨にじめつく林の中のようすが間断なく移り変った(武)

「表情がくもる」(三)などは本来の意味から転用されてずれたものであろう。

「かすむ」はこのグループに入れることもできるが、少しはなれている。

○まわりがぼうっと霞んできました(風) ○もう霞みながらよく見えなくなり出した丘丘の巒(美)

(5V-7)「晴雨」に関する動詞(2.515)のうち、「照る」「照らす」「さえる」など。主語は「月」「日」「電燈」など。(「さえる」は月などに限定されるか。)  
「照らす」は他動詞で、やや文章語的、文学的表現。受動表現のとき、もとの主格は、「で」「に」で表現される。

○十月小春の日の光のどかに照り(武) ○月はさやかに照り(武) ○雲の絶間の月さゆ(武) ○その月が青い柳を照らして(武) ○次の間は電燈で明るく照らされていた(行) ○弱い光で照らされていた地面(行) ○明るく照らされた一室(行)

(5V-8)「晴雨」に関する動詞(2.515)のうち、「降る」に関するもの。主語は「雨」が多く、「雪」「みぞれ」「あられ」など。

○雨の降る寒い晩(行) ○静かな雨が夜通し降った(行) ○雨のふるのによく御出掛ですね(行) ○小雨が降って(行) ○雨が降りこむ(行) ○その雨が……しとしとと降り出した(行) ○春の雨が降り出した(草) ○雨が降り注ぎ(武) ○すこし雨でも降ると(千) ○ジメジメと降り続いた天気(千) ○雪初めて降る(武) ○雪しきりに降る(武) △日本海側でにわか雪が降る ○霧がじめじめ降って(風) ○「大分降ったね」(草)

(5V-9)「晴雨」に関する動詞(2.515)のうち「吹く」を中心とするもの。「風」が主語。

○寒い風が吹いた(行) ○風がざあっと吹いてきて(風) ○風吹く野(武) ○野は風が強く吹き(武) ○風がそよそよと吹く(武) ○風さえ高く吹いた(行) ○風が遠くから吹いてくる(三) ○昼間吹募った西北の風(行) ○そよ吹く風(武) △20メートルの強風が吹き荒れるなかで △20メートルの強い北西の風が吹き荒れて ○時々風が来て高い雲を吹き払うとき(草)

「吹き払う」は他動詞で、このばあいもやや文学的表現であろう。「風」が主語のときは「雲」や「霧」などが「を」の前にくる。

(5V-10)「凍り」関係の動詞(2.5160)、「とける」「こおる」など。「とける」は「雪」「氷」など、「こおる」は「水」などが主語になる。

○浅間山の雪が溶け(千) ○重なったものが溶けて流れ出す(三) ○雪の凍ったのが春までも持越す(千) ○草葺の屋根を伝う濁った雫が凍る(千)

(5 V—11) 「火」関係の動詞 (2. 5161), 「やける」「やく」「もえる」「もやす」「いぶる」「こげる」「こがす」「ともす」「ともる」「たく」「むす」「ほてる」および「きえる」など。

「やく」「もやす」「こがす」「ともす」「たく」「むす」などは他動詞で、「を」をとることがある。「を」の前の名詞はほかの動詞の「が」の前と同じ名詞である。これらの名詞は、全体的にいえば「火」のあるところを指示する。材料、製品であることもある。「もえる」「もやす」「たく」などのばあいは「火」など、「ともす」「ともる」のばあいは「灯」などがくることがある。

○ああ、また浅間が焼ける (千) ○栗も樹の数は焼けて少ない (千) △酒場ビルが焼ける ○草を焼く匂 (風) ○今こっちを焼くがらな (風) ○今はくぬぎの木炭を焼いている (千) ○私たちは小屋で分けて貰ったきのこを焼いた (千) ○竈に火は燃えている (草) ○大きな火がもえている (三) △発煙筒が燃え出した ○何物をも燃やさずにはおかないような夏の光線 (美) ○線香は香気に燻っている (草) ○その幹は根もとの所がまっ黒に焦げて (風) △川島与四郎さんが毛髪をこがした △ともしびがともると ○今火を照いて乾かして上げましょ (草) △ごはんがおいしくたけています △現在各ビルがボイラーをたいている ○青い野面<のら>にはむすような光が満ちている (千) ○両方の頬の熱くほてゝるのを感じた (行) ○両方の目がいっそうほてり出した (三)

「きえる」の主語は「火」「電燈」「光」など。

○宅中の電燈がぱたりと消えた (行) ○すると電燈がまたぱつと消えた (行) ○電気燈の消えない前 (行) ○ろうそくの火は水を注ぎかけられたように消えた (千)

(5 V—12) 「生育」のグループの動詞 (2. 581), 「生まれる」「育つ」; 「はえる」「茂る」「密生する」「黄葉する」; 「萌える」; 「咲く」; 「熟する」「実る」など。「生まれる」「育つ」は主として人間や動物が主語になり、それ以下は主として植物関係の用法。「はえる」「茂る」「密生する」は木、草、葉などが主語、「黄葉する」は葉、木などが主語になる。「もえる」は芽、新緑などについていう。「熟する」「なる」などは「実」「果実」などが主語。「咲く」は花が主語。

△こどもが丈夫でよい子に育つ ○左右の岸に土筆<つくし>でも生えておりそうな (草) ○うまごやしが一面に生える (三) ○日本の木が生えている (三) ○この間の萩が、人の丈よりも高く茂って (三) ○深緑の葉が耳を隠す程茂っていた (行) ○木瓜<ぼけ>の小株が茂っている (草) ○木立が密生して (美) ○黄



葉した林(武) ○樞の類だから黄葉する(武) ○春は滴るばかりの新緑萌え出づ  
 るその変化(武) ○もうじき花が咲くね(行) ○花がいっぱい咲いている(美)  
 ○大根の花の白く咲き乱れたのも見える(千) ○花は上野から向島それから荒川と  
 いう順序で段々咲いていって段々散っていった(行) ○樞が咲いている(草) ○  
 向日葵が咲き(美) ○梅咲きね(武) ○桜は春咲くことを知らねえだね(武)  
 △つつじが咲き始め ○茂みのなかに咲いている百合(行) ○稲の熟する頃(武)  
 ○青麦の穂は黄緑に熟しかけて(千) ○西風が吹けば畑の青麦が熟する(千) ○  
 青麦の熟する時(千) ○珊瑚樹の実が一面に結くな>って(行) ○しいの実  
 がなっている(三)

この種の動詞には本来の意味からはなれた、ひゆ的な使用法もしばしば見られ  
 る。たとえば「平和がよみがえる」「技術が生きている」「映画そのものが生き  
 る」「影響を生む」「成果がみえる」「熟さない表現」など。ひゆ的な用法のば  
 あい、周辺の名詞がちがう。

(5V-13)「死」に関する動詞(2.582),「枯れる」「死ぬ」「死亡する」「殺  
 す」など。「枯れる」は植物に,「死ぬ」「殺す」は生物についていう。「死亡  
 する」は主として人間が主語,「殺す」は他動で,それも人間の行為であるこ  
 とが多い。

○花は萎え,葉は枯れて(草) ○草花の枯れたのやらが(美) △血まみれの女が  
 死んでいた △柔道のチクビラーゼ選手が死ぬ △出血が多く死んだ ○自分が死ん  
 だら(三) △乗っていた六人全員が死亡した △警官一人が殺され ○作の青馬  
 <あお>が急病で死んだんで(三) ○蜂は身を悶えて死んだ(千)

(5V-14)「病氣」に関する動詞(2.585),「病氣にかかる」「病氣になる」,  
 「なおる」など。前者の主語は生物であるが,多くのばあい人間,後者の主語  
 は主として「病氣」である。

○コレラに罹るよりいやだわ妾(行) ○その母がまた病氣にかかって(三) ○妹  
 がこの間から病氣をして(三) △病氣が直っても,禿頭病がなおらないので

以上は新聞用語調査のごく一部のデータと近代文学の作品の数点に見えた用  
 例をもとにして概観したものである。これをもとにして次のようにまとめるこ  
 とができよう。

1. 自然現象は全体としては自動詞を基調として表現される。他動詞はそれに  
 関連した現象を人間がおこすことの表現であるといえよう。たとえば「鳴  
 る」に対する「鳴らす」,「もえる」に対する「もやす」などはこの類である

(すなわちその主語は人間である)。これに対して、自然現象が主語となるばあいの他動詞使用は、どちらかといえば文学的である(あるいはヨーロッパ語的表現を借りたものであろうか)。

2. 同じ自動表現でも、「火が燃える」と「まきが燃える」のように、自然現象そのものが主語になるものと、動作が行なわれているものが主語になるものがある。自然現象全体としてみると、同一の動詞でこの両者を兼ねそなえるものと(「もえる」など)、いくつかのもので分有するものとある(「鳴る」と「響く」など)。

自然現象を表わす動詞が、ひゆ的に使われて他の意味をもつと同時に、自然現象自体が他の種の動詞によって表現されることがある。「雨が降る」の代わりに、「雨が落ちてくる」ということもある。

○本来は暗い夜である。人の力で明るくした所を通り越すと、雨が落ちているように思う。風が枝を鳴らす。三四郎は急いで下宿に帰った。

夜半から降り出した。……(三四郎)

『分類語彙表』で抽象的な関係その他のなかに分類されているもののうち、この種のをひろい出すと、次のようである。

わく——雲わき、林鳴る(武)

やむ——姉さんこの雨は容易に已みそうもありませんよ(行)

たれる——ぼたりぼたりとたれる雨滴<あまだれ>(行)

そよぐ——風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声(武)

ゆらめく——その暗も、いまは何物をも燃やさずにはおかないような夏の光線を全身に浴びながら、何んだか炎のようにゆらめいているやうな感じで(美)

ゆれる——五六足の草鞋<わらじ>が淋しそうに底<ひさし>から吊されて、屈託気にゆらりゆらりと揺れる(草)

たちこめる——終日霧たちこめて(武)

たちのぼる——家々から立登る煙(千)

たなびく——秋の霧は冷やかに、たなびく靄<かすみ>は長閑<のどか>に(草)

そびえる——巒岬<さんがん>とあら削りの柱の如く聳<そび>えるのが天狗岩だそうだ(草)

うずまる——雪に埋まってしまふこんな寒村(美)

ながれる——水流林より出でて林に入る，落葉を浮べて流る（武）

ただよう——夏らしい匂ひが漂ひ出してあるのだった（美）

もれる——家を洩れる電燈の光（行）

そそぐ——砂川は二間に足らぬ小橋の下を流れて，浜の方へ春の水をそそぐ（草）

散る——花は上野から向島，それから荒川という順序で，段々咲いて段々散ってしまった（行）

したたる——滴るばかりの新緑（武）

くねる——流れは林の間をくねって出で来たり（武）

くだける——大きな波の石に砕ける音（行）

みなぎる——漲くみな>ぎり渡る湯煙りの（草）

あふれる——田面に水あふれ（武）

くれる——だんだん日が暮れだした（美）

ふける——夜更けぬ，戸外は林をわたる風声ものすごし（武）

鳴く——家鴨はががあと鳴いて（草）

さえずる——鶯くうぐいす>が……と囀くさえずる（草）

囀ず——小鳥梢に囀ず（武）

以上にあげた例のうち「咲く」(2.5)と「散る」(2.1)、「降る」(2.5)と「やむ」(2.1)のように対になっている表現もある。「したたる」のように、「下にたれる」と解すればより「抽象的關係」的であるが、「水滴落下現象」とすればより「自然現象」的に解されよう。「日が暮れる」「夜がふける」などの結合はかなり強固なものでもある。このように見ると、「抽象的關係」と「自然現象」とはかなり連続的であるとみてもよさそうに思われる。語彙の分類自身にもこのような用法を中心とした諸特徴を分類基準に活用することが考えられよう。そうだとすればこの種の用語の用法に関する研究が用語の分類記述にあたってまず必要な作業であるということができよう。また同時に一般的にいったばあいの分類語彙表の分類基準の問題を、ワルトブルクやバイイなどのと考え合わせつつ、全体的に再検討してみることも必要であろう。たとえば「更ける」という語によって表わされる概念は時間の推移という意味で抽象的な關係に属すると共に、またまったく自然現象でもある。「くだける」というのも

破壊という意味で「作用」という抽象的關係のなかに収められると同時に、その作用自体実は全体として自然現象である。この二者は交錯しているところがある。その意味では分類基準だけでなく分類法についても考えてみなくてはならない。このように見てくると動物・植物の現象と人間の行為（.3）の間の關係にも相接するところがあり（「なく」「育つ」など）、人間の作成物（.4）と人間の行為の間にも中間的なものがある（「自動車がいる」など）ことも考えてみるべきだろう。

## 2. 自然科学などの分野の用語

以上は文学書や新聞から用例を取ったものである。ここで少し分野を変えて、自然科学よりの文献から用語を取り出してみたい。自然科学よりといっても啓蒙的なもので、材料は岩波新書の中谷宇吉郎『科学と方法』、畑中武夫『宇宙と星』の二者である（科、星と略）。

「夜空に輝く（2.501）星は、ごく少数の惑星を除けばすべて太陽と同等な巨大なガスの塊である。もし太陽を星たちの距離にまで持っていったとすれば、太陽はその中で特に目立って明るく光る（2.501）星ではなくなってしまう」（星）

「こういう高温度、高密度となれば、今まで燃え（2.516）ない塊とわれわれが呼んできたヘリウムを主成分とするこの芯が再び燃え（2.516）始めるのである」（星）

「現在のいろいろな生命の科学はみなこの公理を土台にしているのだから、それがほんとうであるから、雑語などというものもできるわけである。一ぺん殺し（2.582）てしまえば、いつまでも腐ら（2.583）ない」（科）

このような例では、「星が輝く」「星が光る」「芯が燃える」など、本質的には前項で述べたことと変わらないような、名詞と動詞の組み合わせである。「殺す」というような人為的操作も、人間社会の出来ごとを描写するのと異なっており、実験などの操作として取り扱われることが多い、この分野の特徴であろう（次の文例の「観測する」も同様）。

しかし一方には、事象全体としては自然現象であるが、これを『分類語彙表』でいう「抽象的關係」すなわち小数点以下が（.1）のようなものの用語で表現することが非常に多いように思われる。例をあげる。

「原始物質が何であったのか、それにはまだはっきりした説がない。アメリカのアルファとベータとガモフは、原始物質が中性子であったという。中性子は不安定で、た

やすく壊れ (2. 1571) て陽子, 即ち水素原子核に変わ (2. 1500) うとする。彼等にしたらがえば, 宇宙のはじめにあった中性子から水素ができ (2. 122) はじめると, 中性子は水素と結合 (1. 1550) して重水素をつくり (2. 386), 更に中性子が次々と付け加わっ (2. 1580) ていって, 重い元素を作りあげていった。もし中性子がゆっくりと崩壊 (1. 1572) し, また原子宇宙がいつまでも同じように濃密であったならば, 重い元素は今観測されているよりもっと多く作られた筈だ。けれども中性子は数十分間で水素に崩壊するし, 同時に宇宙は膨脹 (1. 5161または1. 1580) する」(星)

ここで, これをこの種の分野の表現上の特徴の一つとみる見方と, 分類語彙表作成上の一つの問題として前述したような分類上の問題としてみる見方との, 二つの態度をとることができよう。

### 3. この種の表現における日本語の特徴

日本語にあっては, この自然現象を意味する名詞を主語とし, 自然現象特有の動詞を配するという言い方が少なくないように思われる。たとえば「雨が降る」「風が吹く」「火がもえる」というような言い方がそうである。もちろん, そうならないものもあるし, 同じグループでも相反するもののあること, 以上見てきたとおりである。

ところでこの三つの動詞について外国語と簡単な比較を行なってみよう。いまヨーロッパ語の例としてドイツ語をあげると, 「雨がふる」のばあい, *der Regen fällt* のような表現もあることはあるが, *fallen* は『分類語彙表』式の分類では抽象的關係のなかに分類されるだろう。そしてこのばあい有名なのは, *es regnet* という言い方であって, ほかに *es donnert* 「雷が鳴る」, *es schneidet* 「雪が降る」などのような言い方がある。一方「風が吹く」に当たる表現としては, *es weht ein Lüftchen* (弱い風が吹く) *es bläst ein starke Wind* のような表現がある。「もえる」のばあい, 燃えているものを指すときは, *das Haus brennt* あるいは *der Wald brennt* というような言い方もあり, *das Licht brennt* や *die Lampe brennt* という言い方もあるようである。*es drennt* という言い方は「火事だ」という意味のようであるが, このばあいには *es* を用いている。

このように見てくると, どうやら上記の日本語の「自然現象を意味する名詞

「+助詞が+自然現象を示す動詞」という表現は、上記三者に限っていえば、一般にはドイツ語では es を主語とする非人称構文に対応することが多いということができそうに思われる。いかがであろうか。

更にあえていうならば、日本語の表現では人間行動を意味するばあいは人間を中心として表現し（「こどもがまきをもやす」など）、自然現象の表現は自然現象を中心とする（「まきがもえる」）ようである。自然現象のうちのこの部分に限っていえば、ヨーロッパ語は（スペイン語やイタリア語などを除けば）抽象的な主語を立てるようである。抽象的なことばを主語にすることができるヨーロッパ語的表現とあるいはなんらかの関係があるかもしれない。日本語においてはこの種の抽象表現が存在せず、人間やものを中心とした具体的な表現が好まれる。

言語表現は、もともとある言語の体系内で多次的なかわりあいをもっていると考えられ、これを比較対照することはなかなか困難であると思われる。本来なら比較を行なうためにはもっと広い範囲の表現の相互関係を手がかりにして、比較対照を行なってゆくべきであろう。少部分だけの比較はかえって真相の解明に必ずしも有益でないこともあるが、以上の結果から自然現象を意味する動詞では日本語のパターンに一つの特徴が認められるように思われる。表現の比較をすれば更に多くの部分について行なうべきであるが、今後の課題としたい。